

Title	日本語の受身文の習得に関する文献から見た研究動向
Author(s)	李, 偉
Citation	日本語・日本文化研究. 2015, 25, p. 90-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54496
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本語の受身文の習得に関する文献から見た研究動向

李 偉

1. はじめに

本論文は、日本語の受身文の習得に関する研究の動向を、先行研究を歴史的にたどることによって概観し、考察を加え、今後の研究課題を探ることを目的としている。国際交流基金の『2012 年度日本語教育機関調査結果概要』によると、世界で最も日本語学習者が多い国は中国で、1046490 人であった。中国語圏からの留学生は留学生総数の 7 割以上を占め、今後さらに増加すると思われる。それに、中上級レベルの中国人日本語学習者も増えている。日本語の受身表現を既に学んだ中国人中上級学習者でも、助詞の誤用、能動文受身文間の混用、動詞の活用ミスなどによる文法上の誤りのほか、受身表現を使用すべきところで、使用されていない「脱落」や、使用すべきでないところで使用してしまう「過剰使用」などといった誤りが目立つ。受身は学習が難しい項目の一つとされている。そのための効果的な日本語の受身文指導法が求められている。

本稿は中国語母語話者に焦点をあて、日本語の受身が中国語母語話者から見てどのようなものだと捉えられることが多いか、日本語の受身文の習得に関する文献から見た動向と展望を探っていく。日本語の受身文についての先行研究、中国語の受身研究、中日対照研究、中国語母語話者による日本語の受身の研究、受身の習得研究の教授法・教材論への応用を概観し、考察を加える。日本語の受身表現を既に知っている中国語母語話者学習者にとって習得しにくい受身文はどのようなもので、受身文の習得の過程はどのような誤用が見られるのか、学習者がどのような場面においてどのような誤りを犯すのか、またどうしてそのような誤りを犯すのか、に焦点を絞って、先行研究を集め、検討を行う。

2. 全体的研究動向

2.1 日本語の受身文についての先行研究

まず、日本語の受身文についての先行研究を表にまとめて示す。

表 1：日本語の受身文についての先行研究一覧表

番号	年代別	著者	主な研究結果
1	50 年代以前	山田 (1908)	固有の受身文を貫く共通性として「影響 (=被影響)」を帯びるといふ意味的特徴の存在を主張した。
		松下 (1930)	日本語固有の受身文と欧文直訳体を通して定着した非固有の受身文との間の相違について整理した。

2	50年代	三上 (1953)	動詞の特徴から受身文を分析し、受身文の構成状況によって日本語の動詞を能動詞と所動詞と分類した。「太郎が妻に死なれた」のような文は「迷惑の受身」「被害受身」、あるいは「はた迷惑の受身」と呼んでいる。
3	60年代	橋本 (1969)	有情のものこそが日本語受身の特徴であると指摘した。
4	70年代	鈴木 (1972)	対応する能動文のどの格が主語になるかによって、「直接対象の受身」、「相手の受身」、「持ち主の受身」、「第三者の受身」という四分類法を主張した。
5	80年代	寺村 (1982)	受身文の主語が述語動詞によって表される動作(動き)の影響を直接的に受けるか、影響を間接的に受けるかに基づき、日本語受身文を「直接受身」と「間接受身」に二分していると同時に、意味特徴と構文特徴という二つの視点から直接受身と間接受身を述べている。
6	90年代	工藤 (1990)	日本語の受身文を「直接対象受身文」「持ち主受身文」「相手受身文」「関係者受身文」の四種類に分けた。
		奥津 (1992)	動作主について論述したが、奥津 (1992) はまた動作主が文中に現れていない場合の特徴をまとめた。また、受身文視点固定の原則について論じた。視点固定の原則は一度立てた主語は、必要のない限り、途中で変えない、という原則である。
		尾上 (1998a・1998b・1999)	状態性を用いず、受身根源説にも、自発根源説にも立たず、受身・可能・自発・尊敬を一つにまとめ、主語を場と考え、それら全てを「出来文」(事態全体の出来事を語る文)としている。
7	2000年以降	堀川・森・栗原・和栗 (2003)	事態把握の相違に基づく受身文の二極化という観点により分類を行った。固有・非固有を問わず、自然な形で「に受身文」の共通性をとらえることに新たな可能性を拓いた。
		川村 (2003)	「被影響」の有無に注目する意味区分をめぐる、構文的・歴史的諸特徴を整理し、受身文の学説史を論じた。
		「日本語記述文法研究会編 (2009)」	何を主語として表現するかによる直接受身文、間接受身文、持ち主の受身文の三分類を提示した。
		志波 (2012)	小説の会話文、小説の地の文、新聞の報道文、評論文という四つのテキストコーパスに基づく受身文の実態を研究した。

先行研究から明らかにできることは次のとおりである。50年代以前は、固有の受身文に直訳できない西洋語受身文が非情物主語であることから、「非情物主語の受身文は日本語固有のものではない」という認識が生まれた。三上説では、「まともな受身」と「はた迷惑の受身」とに分けられる(1953)。以降はまた、受身文の分類に関する論述が見られ、「迷惑の受身」と自動詞による受身文が注目された。70年代になって、受身文分類への関心が高まっていく。直接受身と間接受身の中間的なものをより詳しく分類したのが鈴木(1972)である。80年代から意味特徴、構文特徴、受動化機能に関する論文が増加し、分

析も詳細化した。90年代では、動作主、視点、受身とその周辺に関する論文が多く見られた。2000年以降は新しい視点からの分類研究も進み、受身表現認知モデルへの注目とコーパスに基づく受身文の実態研究が行われている。

日本語の受身文については、いくつかの角度から研究がなされてきた。

受身の判断基準として文法的標識「(ら)れる」の有無が理解一般的だと思われるが、それは動詞の形態論的な側面を重視しすぎている傾向があると、村木(1991)では対応する能動文の有無から「注意を受けた」のような表現に「迂言的な受動表現」という名称をつけた。教育現場では、中国人学習者はそのようなコロケーションを能動表現として理解する傾向が見られ、誤りを犯しやすい点の一つである。

有情の受身を日本語固有の受身、非情の受身を非固有の受身と認識している研究者として、山田(1908)、松下(1930)、森田(2002)等が挙げられるが、異なる考えを持っている研究者もある。近代以前の日本語に固有の種類を受動文と欧文直訳文体の影響によって持たされた非固有の受動文がある(金水, 1993)。奥津(1983)、金水(1993)等で述べられたように、古典文献には相当の量の無生物名詞主語の受身文があることは見逃してはいけない。

ニヨッテ受動文は欧文直訳体の影響により成立した新しい表現である(金水, 1991)。仁田・益岡(2000)で述べてあるように、現代語においても、非情物が主語になる場合には動作主を「に」で示す受身文は認められにくく、「によって」を要求する。張(1997)は動作主マーカ―についての論述があり、「に」、「から」、「によって」を「代表的動作主マーカ―」と名づけ、それ以外のものに「二次的な動作主マーカ―」という名称を与えた。

三上説の流れを受けた寺村説では、構文的な特徴によって「直接受身文」と「間接受身文」の二種類に分けられる(寺村, 1982)が、寺村の二分法に異論も唱える研究者も少なくない(表2を参照)。庵(2001)はその中間的な性質を持つもの「受け持ちの受身」の存在を指摘した。同じ二分法であるが、いくつかの角度からの研究が存在している。久野(1983)は利害関係の有無の視点から日本語の受身文を「意味上中立受身」と「被害受身文」とに分けた。益岡(1987)は叙述の種類から「属性叙述受動文」と「事象叙述受動文」に分け、「事象叙述受動文」の下に「降格受動文」と「受影受動文」とさらに詳しい分類を行った。

対応する能動文のどの格が主語になるのかという視点からの分類(鈴木, 1972)を発展させた形で、工藤(1990)の分類がある。受身文を大きく二つに分類し、行為者明示非明示と主語の性質を軸にさらに詳しい分類をした。行為の対象が人である場合、ヲ格、二格、カラ格は主語に来ることが可能である。それに対し、行為の対象が人ではない場合、基本的にヲ格しか受動文の主語にはなりえない、と述べている。行為の対象と受身文主語との関係に関する研究として、山内(1997)も持ち主の受身について研究を進めている。

以上をまとめると、表2のようになる。

表2：日本語の受身文の諸分類の関係

研究者	太郎が夏子に殴られた。	太郎が夏子に足を踏まれた。	太郎がスリに鞆を裂かれた。	太郎が妻に死なれた。	補充
寺村秀夫	直接受身	間接受身			庵功雄の「受け持ちの受身」説と村木新次郎の「迂言的な受動表現」説
工藤真由美	当事者受身			関係者受身/ 不利益受身	
鈴木重幸	直接対象受身	相手の受身	持ち主の受身	第三者の受身	
仁田義雄	まともな受身	持ち主の受身	第三者の受身		
山内博之	斜格昇格型受身	属格昇格型受身		新規主格型	
張麟声	直接受身		持ち主の受身	間接受身	
益岡隆志	属性叙述型受身			事象叙述型受身	

2.2 中国語の受身の研究

中国語の受動文は標識のあるタイプと標識のないタイプに分けられる。標識（「被」、「叫」、「让」、「给」のような）のあるものは「被字句」、標識のないものは、一般的には意味上の「被动句」あるいは「受事主语句」と呼ばれる。马（1898）は受動文の最も基本的な語順について論じた。“为、于、见、被”など介詞の文法特徴にも言及した。吕・朱（1952）は受身標識の“被”を副動詞と名づけ、「被动式」（いわゆる受身文型）を伝統的なもの、完全的なもの、簡化的なものとして三種類に分けた。吕（1965）は「被字句」と「把字句」と「主动句」は互いに転換可能かという問題について分析した。中国語被動表現はその働きとして不幸又は不愉快な意を表すのが基本的で、「例外」の場合は恩を受けていることがほとんどである、と王（1985）は指摘した。橋本（1987）は中国語の被動式の由来と発展を考察し、言語地理の角度から受動標識を検討した。「被字句」から「叫/让字句」への受身文型の発展経緯から、一つの言語における構文発展は連続なものでなくても可能だと指摘した。橋本（1987）の考えでは、中国語と北部のアルタイ語との中世時期の言語接触が、受身文型の使役受身両方使用可能な用法変化を促進した。その考察から、一つの文法カテゴリーは言語接触を通し、類型の枠を超え、別の言語に伝わることも可能だと述べている。また、社会異動、異民族接触、地域住民移動など、言語自体以外の、構文の連続でない発展に影響を与える可能な要素を予測した。李（1994）は20世紀90年代の中国語被動句の構造と類別の代表的な研究とされている。意味論からの研究も存在するが、吕（1990）、杉村（1998）などがあげられる。無標の「被动句」は「受事主语句」とも呼ばれるが、张（1991）は、「受事主语句」を三種類に分けた。考察の結果として、「受事主语句」の主語はほとんど無生物であることがわか

っている。陸(2004)も同じ観点を持っている。王(1998)は単音節動詞と双音節動詞の角度から「无标被动句」の語義的特徴を分析した。邢(2004、2006)は通時的な角度から考察し、「承賜型」(いわゆる受益型)の被動句の研究も進めた。刘(2003)は「被字句」は動作の受動者の立場に立って理解する構文であって、「被」という字の前の主語は話題であると主張した。木村(2005)は受身標識としての「给」の使用を検討した。「给」の後ろに来る動作主は「动因」の意を表している。つまり、対象が自らの意志によるものではなく、動作の作用を受けて、ある状態に置かれている誘因となっているということである。[N1+“叫、让”+N2+VP]という構文が中国語ヴォイス体系の中で使役態のみならず受動態をも担っている。古川(2007)は、使役態におけるN1はN2に対して行動指令を下す(起点)としての意味役割を果たすものであり、他方、受動態におけるN1はN2の行う行為を被る(終点)としての意味を果たすものである。このように見るとき中国語の“叫、让”構文においてN1の意味役割が「起点」と「終点」の反転関係になることがわかるが、これは正に文法範疇において「凹凸転換」を具現化していることを表すものである、と指摘した。杨(2010)は被動式発展と子供の受身文習得順序からの示唆に基づいて、被字句の生成について論じた。

2.3 中日対照研究

姚(2002)は文学作品における受身文について、意味と構文の二つの角度から中日両言語の対照研究を進めた。直接受身文の主体は有情者である場合、受動文はほとんど有標である。直接受身文の主体が無情物である場合、受動文の構文は中国語の無標の表現との対応ができる。間接受身、持ち主受身は中国語での表現はほとんど有標になると述べている。杉村(2003)は中日受身文の比較対照研究を通し、中国語にも日本語にも直接受身と間接受身が区別されることと、それぞれの「语义动因」(ここは「受身概念」に相当する。)が異なることを二点指摘した。具体的には、話し手の主観感受は日本語の受身文の「语义动因」と言える。それに対し、客観世界の授受関係の重視は中国語の受身文の「语义动因」であると述べている。李(2009)は現代語における中日受身表現の比較対照研究を進めたが、構文上の成立条件と語用的な成立条件を検討した。林(2010)は「被+○○」という新しい構文の理解と翻訳問題をめぐって、中日両言語における動作主主語受動文を研究した。李(2012)は均衡コーパスを利用し、非構文要素の角度から、中日受身表現の対照研究をした。楊(1989)は文法的条件と語用的条件の二つの面から中国語受身文(一般受身文と意味受身文)と日本語受身文(直接受身文と間接受身文)を論述し、「中国語の受身文は日本語と比べて、一般に「不如意」(このましくない)の色合いが濃い」と指摘した。中国語では、不如意の結果の場合「被字句」になりやすい。良い結果の場合「被字句」になりにくい。高橋(2014)は、日本語の受身文に対応する中国語の文の調査を行ったが、中国語では“被”字構文、語彙上の受身文、主述文、“把”字構文、使役文などに訳されていると述べている。一つの事態が多種の文で

表現されることを意味している点から、中日両言語にはそれぞれ独自の文体系があり、文レベルでの対照研究が可能であることを意味している、と指摘した。

2.4 中国語母語話者による日本語の受身の研究

次に、文レベルと談話レベルという二つの角度で中国語母語話者の受身習得研究を整理する。まず文レベルであるが、中国語と日本語の受身表現は異なるため、中国語母語話者による誤用もある。その根拠として、楊（2013）が挙げられる。楊（2013）は日中両言語の誤用例をいくつか取り上げ、その誤用の原因などについて説明した。語用論的な意味やモダリティ性、さらに視点の違いなど多くの点にズレが見られることを明らかにした。日中両言語において、それぞれの表現が異なる機能を有すると同時に、異なる視点や認知の仕方によって事態が言語化されている、と指摘した。望月（2009）は中国語を母語とする上級日本語学習者の作文コーパスから動詞の自他・使役・受身・可能に関わる誤用を拾い上げ、中国語と対照をし、母語干渉による要因を考察した。受身の誤用は受動形式の脱落による誤用が顕著であると指摘した。田中（2010）はなぜ受身の習得研究が少ないのかという点から、日本語の受身の分類の多様性、「受身文」と視点・他のヴォイスとの関わりを述べた。受身文の研究を第一言語習得、対照研究、第二言語習得（幼児）、第二言語習得（成人）の順に概観した。各言語で検証し比較することによって受身文習得の普遍的な側面を明らかにできると主張した。田中（2010）は第二言語習得に関する先行研究を検討する文献研究である。本論文と田中（2010）と先行研究を整理する角度が大きく違っている。本論文は2014年12月までの数多くの研究がなされてきた受身について、日本語・中国語・外国語としての日本語の習得など多角的に先行研究を記述し、中国人日本語学習者の受身習得の研究動向を把握することに試み、考察を加える。その上で、受身の中日対照研究、習得研究の成果が今現在どのように教育に生かされているかを記述し、中国人日本語学習者の受身習得についての研究の可能性を述べる。張（2012）は中国人日本語学習者の受身文の習得順序を考察した。中国にもある直接受身文が一番先に習得されるが、中国にない直接受身文は最後に習得されるということが明らかになった。また、持ち主受身文は間接受身文より先に習得されると報告した。王（2012）は母語転移の角度から中国人学生の受身文習得難易度分析を進めた。黄（2013）は2年間以上日本語を勉強してきた中国人日本語学習者を対象に調査を行ったが、データの分析から視点の統一性より被害の意味のほうが習得しやすく、視点統一性の習得は特に文産出の面ではレベルアップしにくいと指摘した。杉村（2014）は動作主の不注意による対象変化を表す場合に焦点をあて、日本語を母語とする中国語学習者における中国語の自動詞表現・他動詞表現・受身表現の選択について研究を進めた。日本語母語話者、日本人中国語学習者、中国語母語話者の中国語についてそれぞれ自・他・受身の選択テストを行い、母語と中間言語と目標言語の違いを比較した。

劉（2005）は述語動詞の属性と形式という観点から中日受身表現を比較し、日本語の影響

による日本人留学生の中国語の「被动句」学習の注意点を検討した。中国語の受動文に用いられる述語動詞は単音節動詞の場合、その言葉によるコロケーションで受身の意を表すのが普通である。日本語の助詞の働きは他の成分で果たすことになる。また、中国語の自動詞性動詞(非及物動詞)による受身文は数少ない。日本語の自動詞受身文はより広い範囲で適用されている、と指摘した。王(2006)は中日両言語における受身文の主格を比較対照した上で、「困难等級模式」(筆者訳:難易度レベル別基準)理論を利用し、中国語母国語背景の日本語学習者が日本語の受身文を習得する際の「习得日语被动句时的困难等级序列(筆者訳:日本語受身文習得の難易度判定基準)」を提起した。具体的には「0級主格が直接受影者である受身文>1級主格が直接受影の持ち主である受身文>2級主格が関係場所である受身文>4級主格が関係者である受身文、4級主格が関係の持ち主である受身文、4級主格が間接関係者である受身文」という習得順序を予測したが、シラバスと教材の編集に使用するためには、教育現場での検証も必要だと述べている。

次に談話レベルでの中国語母語話者の受身研究であるが、渡邊(1995)は談話展開における受身の使用実態を「正用・誤用・非用・その他」に分けて分析を行った。学習者の使用した受身は直接受身のみである。非用の原因には談話展開の仕方(学習者は複数の人物を主語に立て、能動文を使用する)が関係する、という指摘がある。山本(1997)は中国語系日本語学習者の中間分析より母語干渉による異文化間コミュニケーション上の問題を検討した。

2.5 受身の習得研究の教授法・教材論への応用

習得研究は日本語教育と互いに補い合い発展しつつある。習得研究の結果を日本語教育に生かすことは重要である。教師は習得研究の結果を把握することを通して学習活動及び教育活動についての理解を深めることができると考えられる。学習者のある段階における共通の特徴と個人的な特徴を把握することに可能性を与えるだけでなく、シラバスデザイン、教材開発、授業改善の工夫もさらに高いレベルで学習者のニーズに合わせることに一歩近づくといえる。その一連の改善を通してよりよい学習環境として学習者へ還元することになる。

次に受身の中日対照研究、習得研究の成果が今現在どのように教育に生かされているかを報告する。葉(2003)は中国の大学で使われている日本語の教材『新編日語』から受身文の説明部分を取り出し、受身文の特徴や使用上の注意点を考察した上で、改善した受身文の分類法を提案した。そして、その各種類を中国語の表現と比較し、中国語を母語とする日本語学習者に受身文を教えるとき、「非情物主語の直接受身文」や「自動詞受身文」や「目的語がつく間接受身文」などは、指導上のポイントとしてあえて取り上げるべきだ、と指摘した。同じ中国の教科書の中の受身に関する研究として、劉・趙(2010)、劉(2013)が挙げられる。中国語を母語とする日本語学習者が受身文を学習し、応用するとき、母語の干渉で、翻訳がうまく進まない状況がしばしば見られるという問題を解決するために、劉・趙(2010)

は中国で出版された教材の中の受身文に関する記述が不十分で、例文も不自然であるなど、学習者に誤用を引き起こす可能性がある、と指摘した。特に自動詞によって構成された間接受身文は中国語を母語とする学習者に理解しにくい項目の一つで、受身指導を有効に進めるには、教材以外の国内外の文法書も参考にしながら、対策を考えるべきだと述べている。刘（2013）は『新版中日交流標準日本語』（中国で第二外国語教材としてよく使われる）と『新編日語』（日本語専攻の基礎日本語の教材としてよく使用される）という二冊の代表的な教材における受身文解説を例にして、視点と受身文との関係についての解説がなかったということと、文法・文型を強調しすぎる傾向があり、文脈に基づく練習は不自然であることを指摘した。その対策として、強化練習を通して、意味と語用の角度から受身文についての理解を深めさせること、比較対照法を生かすこと、などが取り上げられる。程・韦（2014）は受身文の解説デザインを例にして、語用論から日本語閲読教材の編集への示唆を語った。具体的には、文脈説明の部分を増加する、語用論の基礎知識を適当にコラムで紹介する、読解の練習問題の設定は作者の意図を問うような問題となるように工夫することなどを、示唆をした。

3. 先行研究で残された課題

3.1 従来の研究で明らかにされていなかった問題点

第一に、多くの異なる分類研究がされてきていることから、研究者の受身研究への関心度が見られるが、各研究者が微妙に異なる分類を用い、研究成果の比較が難しくなる（表2を参照）。一方、受身文習得の難しさも表していると考えられる。習得研究で学習者に理解しやすい定義と分類を検討する研究が期待されるといえよう。

第二に、中国語受身の先行研究から「被」構文の由来と発展、被動表現の基本的な意味特徴は明らかにできるが、「无标被动句」自体の研究はまだ少ないように見える（5本しか見られない）。

第三に、構文、意味、語用に関する中日両言語受身の比較対照研究がなされてきた。受身と周辺表現との関係に関する対照も着目されるようになってきたと考えられる。均衡コーパスに基づく非構文要素の対照研究、中日受身表現の理解と翻訳についての検討も挙げられる。教育現場で、多様な背景を持つ学習者がどのように日本語の受身文を用いているかを分析する異文化場面の研究も求められるようになった。

第四に、先行研究から中国語母語話者の受身習得順序が提案されている。直接受身文が一番先に習得され、持ち主の受身、間接受身、意味上の受身に関する習得は時間がかかると予測できる。両言語の受身表現は対一の関係ではないので、学習者は文法的特徴を踏まえた上で、受身文についての理解を深める必要があると考えられる。受身習得の量的研究は見られるが、学習スタイルと認知スタイルを考慮に入れる質的研究が期待される。

第五に、中国国内で使用される教材の多くは直接法で教えることが前提で、場面や機能を

文型と組み合わせることが多い。先行研究から基礎日本語の教科書の受身記述が見られるが、会話教材の受身記述考察はまだ見られない。受身の習得研究の教材論への応用研究は一本しか見られず(程・韦 2014)、教授法への応用検討よりも少ない。今後は理解能力と使用能力重視の応用研究が期待されるといえる。

3. 2 従来のデータ収集方法では明らかにならなかった問題点

第二言語習得の研究のためにデータ収集の方法として、質問紙調査法とコーパス研究法と大きく分けられる(毛, 2011)。具体的には、参与観察、自由作文・日記、対話法、文章完成法、実験法、文法性判断テスト法、内省法等が挙げられる。第一に、経費、時間の制限で、質問紙調査の対象の量は限られるケースが少なくないといえる。第二に、中間言語の習得はいつも変化するものだとされるが、調査対象は定まった対象ではないので、理系のよう同じ対象に何度も調査・テストを実施することは難しいと考えられる。第三に、調査目的と焦点が明確であるほど、調査対象が意識的に自分の行為をコントロールする傾向があるので、データの自然性を検討すべきところがあるといえよう。第四に、テストを受ける関係で、調査対象の産出データには制限があり、調査対象内部にあるルールを反映できない可能性がある。従来のデータ収集方法では分からなかった実態があるのだと考えられる。まとまった量の、学習者による産出した受身文が必要だといえる。

3. 3 新しいツールと方法の導入について

従来のデータ収集方法では分からなかった受身習得の実態があるのだといえよう。その実態を明らかにするためには、まとまった量の学習者が産出した受身文が必要であり、そのために学習者コーパスは有用だと考えられる。情報機器の普及とともに学習者自然産出データの利用が注目を浴びてきている。于康を代表する研究チームは作文添削ソフト、タグ付与ソフトの開発に力を入れている。受身文の習得研究もそのタグ付与ソフトを利用することが十分可能であると考えられる。

張麟声を代表とする研究会の研究者は誤用観察と検証調査を統合する対照研究を進めている。井上(2002)では、張(2001)の研究について、「学習者の誤用そのものの記述、分析というより中国人日本語学習者の誤用に関する文法研究の観点からの理論的考察という性格が強い」と述べている。受身の習得研究を進めるとき、「仮説・実験検証」の方法は利用できると考えられる。

3. 4 学習者の話し言葉コーパスに基づく研究

劉・趙(2010)、劉(2013)、毛(2011)、程・韦(2014)等これまでの先行研究では、どのような場でその受身文が発せられたのか、状況や文脈などがあまり考慮されていなかった。文の意味を理解しようとする際に、その文が発せられた状況や文脈のなかで意味を理解

しなければならない。発話の場面依存性について、「日本語では特にその依存の度合いが高い」と寺村（1990）が指摘している。許（2004）はその考えに従って「日本語のさまざまな表現の中に、特に場面依存性が強い表現の一つに受身が挙げられる」と述べた。日常会話の場面における受身文の運用は不可欠といっても過言ではないだろうが、国立国語研究所によって学習者による話し言葉に関する研究論文は管見の限り 3 本しか見られない。

4. まとめ

受身文に関する研究は、数多く行われている。日本語の受身文の習得における研究の動向と展望を探るために、2014 年 12 月まで入手できる範囲の中国語関連文献と日本語関連文献を分析した。日本語の受身研究、中国語の受身研究、中日対照の研究、中国語母語話者受身習得研究、教授法・教材論研究が主要な研究分野となっている。日本語学関係、中国語受身関係、中日対照関係の分野が多く（56 本）、構文、意味、形態に関する研究に偏っている。従来少なかった中国語母語話者の日本語受身文習得（2006 年以降の発表しか見られないが、それぞれ 2006 年 1 本、2008 年 2 本、2010 年 2 本、2011 年 2 本、2012 年 7 本、2013 年 3 本、2014 年 5 本である。）と教授法・教材論領域への応用研究が徐々に増えており（2010 年以降の発表しか見られないが、それぞれ 2010 年 2 本、2011 年 2 本、2012 年 1 本、2013 年 1 本、2014 年 1 本である。）、多言語比較対照研究、受身・使役等表現選択の研究が現れてきている。とりわけコーパスと日本語教育の統合を目指す研究が多くなり、さらに、作文添削ソフト、タグ付与ソフトを活用する研究手法を導入したものがある。質問紙調査法とコーパス研究法の統合が期待される。中国日本語学習者に使いやすい習得研究、日本語教育の現場に直接還元できる中間言語習得研究が本格的に始まったところである。

【主な参考文献】

〈日本語の参考文献〉

- 庵功雄（2001）『新しい日本学入門：ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
- 大河内康憲（1983）「日・中語の被動表現」『日本語学』明治書院 vol.2 4月号 pp.31-38
- 尾上圭介（1999）「文法を考える 7 出来文（3）」『日本語学』18 卷 1 号 pp.86-93
- 川村大（2003）「受身文の学説史から——「被影響」の有無をめぐる議論について」『月刊言語』4月号大修館 pp.42-49
- 奥津敬一郎（1983）「何故受身か？—<視点>からのケース・スタディ」『国語学』132 号 pp.65-80
- 奥津敬一郎（1992）「日本語の受身文と視点」『日本語学』明治書院 vol.11 8月号 pp.4-11
- 金水敏（1991）「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164 号 pp.1-14
- 金水敏（1992）「場面と視点—受身文を中心に」『日本語学』第 11 卷第 8 号 pp.12-19
- 金水敏（1993）「受動文の固有非固有性について」『近代語研究 第九集』武蔵野書院 pp.

475-508

- 工藤真由美(1990)「現代日本語の受動文」『ことばの科学』vol.4 むぎ書房 pp.47-102
- 久野暉(1983)「中立受身文と被害受身文」『新日本文法研究』大修館
- 迫田久美子(2001)『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アクル
- 志波彩子(2012)「コーパスに基づく日本語受動文の実態」東京外国語大学総合国際学研究院
- 杉村泰(2014)「日本語を母語とする中国語学習者における中国語の自動詞表現・他動詞表現・受身表現の選択について—動作主の不注意による対象の変化を表す場合—」『ことばの科学』28号 pp.145-156
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 張麟声(1997)「受動文の分類について」『現代日本語研究』第4号 pp.1-14
- 張麟声(2001)『日本語教育のための誤用分析-中国語話者の母語干渉20例-』スリーエーネットワーク
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
- 高橋弥守彦(2014)「日本語受身文の中国語訳について」『日中言語対照研究論集』16号
- 田中真理(2010)「第2言語としての日本語の受身文の習得研究—今後の研究の可能性—」『第二言語としての日本語の習得研究』13号 pp.114-146
- 日本語記述文法研究会(編)(2009)『現代日本語文法②』くろしお出版
- 仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して』くろしお出版
- 仁田義雄、益岡隆志等(2001)『日本語の文法I 文の骨格』岩波書店
- 古川裕(2007)「中国語らしさの認知言語学的分析」『日中対照言語学研究論文集』pp.225-259
- 許明子(2004)『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房
- 堀川智也・森篤嗣・栗原由加・和栗夏海(2003)「事態把握の相違に基づく日本語受身文の分類」『日本語・日本文化研究』13号 pp.29-38
- 益岡隆志(1987)『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- 村木新次郎(1989)「ヴォイス」『講座日本語と日本語教育』明治書院
- 望月圭子(2009)「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析—中国語との対照から」『東京外国語大学論集』78号 pp.85-106
- 森田良行(2002)『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 山内博之(1997)『日本語の受身文における「持ち主の受身」の位置づけについて』『日本語教育』92号 日本語教育学会 pp.119-130
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』寶文館
- 楊凱榮(2013)「誤用例にみる日中表現の違い：日中対照研究の現場から」『日本語学』vol.32-13号 明治書院 pp.54-64

- 葉菁 (2003) 「日中受動文の対照研究：『新編日語』における文法説明への提案」『早稲田大学日本語教育研究』 pp.261-274
- 姚麗萍 (2002) 「中国語と日本語の受身文の構文と意味についての比較」『中日対訳語料庫的研制与应用研究論文集』外語教学与研究出版社
- 李偉 (2009) 「現代語における中日受身表現の比較について」山東師範大学大学院日本語言語文学専攻修士論文
- 渡邊亜子 (1995) 「中国語母語話者の日本語受身文の使用実態とその背景—母語との対照からの仮説設定—」『言語文化と日本語教育』9号 pp.216-227

〈中国語の参考文献〉

- 程慧慧、韦小燕 (2014) 「语用学理论对日语阅读教材编写的启示—以被动句讲解设计为例」『吉林省教育学院学报』第11期 pp.148-149
- 李金蓮 (2012) 『日汉被动句对比研究』山东大学出版社
- 李珊 (1994) 『现代汉语被字句研究』北京大学出版社
- 李伟 (2008) 「浅析日语被动句中的动作施事表示词」『山东外语教学』增刊第6期 pp.18-20
- 刘姝 (2005) 「汉日被动句谓动词比较——日本学生汉语“被”字句偏误兼析」『云南师范大学学报(对外汉语教学与研究版)』第5期 pp.60-63
- 刘晓霞 (2013) 「基础日语教材被动句考察」『长治学院学报』第6期 pp.72-74
- 刘卫红、赵平 (2010) 「日语教材中被动句问题的探究」『南通职业大学学报』第3期 pp.55-58
- 吕文华 (1987) 「被字句和无标志被动句的变换关系」『句型和动词』语文出版社
- 毛文伟 (2011) 「二语习得量化研究中两种数据采集方法的对比研究」『日语学习与研究』第1期 pp.12-18
- 陆检明 (2004) 「有关被动句的几个问题」『汉语学报』第2期 pp.11-17
- 木村英树 (2005) 「北京话给字句扩展为被动句的语义动因」『汉语学报』第2期 pp.14-21
- 桥本万太郎 (1987) 「汉语被动式的历史·区域发展」『中国语文』第1期 pp.36-49
- 杉村博文 (2003) 「从日语的角度看汉语被动句的特点」『语言文字应用』第2期 pp.64-75
- 王黎今 (2006) 「被动表述主位角色的汉日对比」『日语学习与研究』第4期 pp.51-56
- 王力 (1985) 『王力文集』山东教育出版社
- 王忻 (2003) 『新日语语法—时体态语气』外文出版社
- 邢福义 (2006) 「汉语被动表述问题研究新拓展」华中师范大学出版社
- 徐磊 (2006) 「日语被动句学习难点解析」『日语学习与研究』第3期 pp.84-87
- 王灿龙 (1985) 「无标记被动句和动词的类」『汉语学习』第5期 pp.15-19
- 张永旺 (2006) 『日语被动句』旅游教育出版社
- 张志公 (1991) 『张志公文集』广东教育出版社